

平成 23 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

「甲南大学における教育哲学 ―学生の心に響く大学教育の実践に向けて―」

No.119 研究幹事：渡邊順司（理工学部）

【はじめに】

甲南大学は平生精神を基軸とした教育理念を掲げ、世界に通用する人材の輩出に力を入れている。「個性を力へ。」を学生教育の主眼に置きつつ、「徳育・体育・知育」の実践による人材育成を続けてきており、「学生第一主義」による大学教育を推進している。また、教育基本方針として、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを大学全体として階層的に策定し、これを理念としている。

一方、実際の講義の現場を含め大学生全体にもあてはまる問題とされている事例が増えつつある。例えば、「没個性化」なる極めて限定された集団で常に同一の行動をすることに学生生活の本質があると考えられる風潮がある。また、「修学意欲の低下」に見られる単位の修得と卒業だけに目的が置き換わっている例や、自由であることの主旨をはき違えた「マナーの低下」などがある。これらはいずれも本学の教育理念に掲げている三項目と対極をなすものであるが、何らかの対策を講じなければこれらの事例が拡大すると考えられる。このような理念と現実の乖離が生じた原因として、甲南大学を含め大学において教育・研究に従事する教職員の大半は、「昭和」の時代に高等教育を受けた世代であり、現在の在学生が「平成」の世代であることによるものと考えた。具体的には、社会基盤の劇的な変化に教育環境が対応しきれていないのではないかと考えられる。いわゆる「昭和」の時代は、自由と責任を自然に理解できていた上に、人生は自分で決めるものであるという風潮が一般的であった。本研究では、このような教育・研究がおかれている社会環境の変革期に対して、学生の心に響く大学教育を実践すべく研究チームとしてテーマを設定し、教育する対象である学生の心の拠り所の変化に対応できる「学生の心に響く大学教育とは何か？」について、本学の事例を中心に調査研究し、本学の教員がもっている教育哲学について包括的にまとめ、本学の教育水準を高めるとともに持続的な人材育成に貢献することを目的としている。

【平成 23 年度の研究成果】

学生の心に響く大学教育を実践する一つの方法として、「講義自体、教員自体に魅力があって、受講することの有り難み」が重要ではないかと作業仮説を立てた。すなわち、講義を真剣に受講しなければ損をするという気持ちが学生の中に芽生えるかどうかを鍵になると考えた。この中で、教育・講義の方針には「管理」と「放任」の対極の考え方が存在し、また教育対象である学生の立場には「まじめに取り組む」と「楽をして乗り切る」の対極の姿勢がそれぞれ存在している。これらの無数の組み合わせの中で日々の講義が進められている。このため、実際に講義を担当している教員を対象として、平成 23 年度は文学部から 2 名、理工学部から 1 名、フロンティアサ

イエンス学部から1名の教員を対象にヒアリングを実施し、それぞれの学部学科に基づく考え方を集積してまとめた。

この中で、担当科目に対する教員の意識の高さと科目の修得に対する要求レベルの高さによって、本研究で取り上げた修学上の問題点がほぼ解消されていることが明らかとなった。基礎を教える科目あるいは応用を教える科目など、科目の位置づけの明確化と教員が「何を教えたいか」、あるいは「何を学んでほしいか」が明瞭になるに従い、履修意欲が増大することが明らかになった。

【平成24年度の研究にむけて】

学生の心に響く教育・研究とは何であるのか？について、専任教員へのインタビューから浮かび上がってくる現実と理想を集約し、甲南大学における教育哲学について総括して最終の叢書として報告する。